

令和6年2月17日

## 南の風 OQT (オリンピック女子最終予選) 特集号V

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

本号ではカナダ戦から OQT 全体を、指揮官恩塚ヘッドの戦略・戦術から振り返り、さらにパリ五輪へ向けた考えを書きます。

まずカナダ戦の振り返りです。恩塚ヘッドはカナダ戦の後のインタビューで「もう言葉にできないくらいうれしくて、涙があふれ出てきてしまいました」と語りました。

このゲームカナダは、日本の3P シュートを徹底的に潰しに来ました。日本の3P 試投数は、20本に終わりました。(スペイン戦は40本以上)

しかしここで注目すべきは、日本は3P を止めに来るクローズアウトによって生まれたゴール下のスペースを的確に突いて、2点シュートを着実に決めたことです。

そして付け加えて言えば、日本がドラッグスクリーンでシューターを空ける戦術に対して、カナダはスイッチで対応してきたのですが、そのとき速さのミスマッチが起こります。カナダがスイッチをすることによって、サイズのある選手が宮崎、山本選手にマッチアップします。すると高速ドライブでペイントアタックする宮崎、山本選手について行くことができずレイアップを許してしまうのです。

この戦術は、2022年の女子ワールドカップで予選敗退した反省を生かしたものでした。もう少し深掘りすれば、東京オリンピックの決勝で日本がアメリカに敗れたゲームで、アメリカが徹底してきたスイッチディフェンスでした。スイッチディフェンスに対応することは、日本の命題だった気がします。

恩塚ヘッドも相手のスイッチディフェンスに対して「プラン通りです」と語っています。カナダの仕掛けも想定内だったのです。

また恩塚ヘッドは続けて次のように語りました。

「ハンガリー戦でスイッチに対するカウンターが停滞してしまいました。その停滞の要因をチームで分析し、もう一度勝ち筋を整理しました。試合前日の夕方、コーチと選手に私からプレゼンをして、選手がどう思うかを聞いて、みんなで同じページで戦おうと準備して今日のゲームに臨みました。『走り勝つシューター軍団』というコンセプトには、走り勝って中にドライブできることも入っています。3P とドライブができると、相手には3P を消さないといけないし、3P を消そうと思ったらドライブされるというジレンマが生じます。そこを選手たちが的確にプレーできたのが素晴らしかったです」

カナダ戦は3P シュートを多く放つことはできなかったですが、日本の持ち味の機動力を全面に押し出す戦いは、観ている私たちにも伝わってきました。その結果、徐々にカナダの足が止まりました。明らかにガス欠が起きていました。日本にとっては大きな幸運となりました。試合終盤のカナダの連続ターンオーバーの流れも、「僕たちは走り勝つことをみんなで共有していました。チームで戦い抜く、やり抜いて相手を消耗させて勝つことを目指していたので、ある意味想定通りでした」と恩塚ヘッドは見えました。

今回のOQTは、日本にとって大きな自信を得られた舞台となったのではないのでしょうか。課題であった3P シュートを消された時に、『どう停滞せずに攻撃をリクリエイトするか』、ということを実践できたからです。次号では、恩塚ヘッドのパリ五輪に向けての戦略に触れます。